

## 書かれた「この地」を読む

## 📖 みのかもブックマーク



▲絵葉書「美濃太田駅前 亀屋旅館」(美濃加茂市民ミュージアム所蔵)

ブルーノ タウト  
Bruno Taut  
(1880-1938)

東プロイセン生まれ。ドイツ国内の他、モスクワ、日本、トルコなどで活動した世界的建築家。日本インターナショナル建築会の招きで1932~36年の間、日本に滞在。日本の建築や文化に関する著作を多数残した。1936年にイスタンブール芸術大学の招聘を受けてトルコに渡り、同地で逝去した。

## 建築家ブルーノ・タウトの旅日記

ドイツの建築家ブルーノ・タウトは1933年3月、ナチス政権から逃れるように国を離れ、来日します。タウトは滞日中の3年半に桂離宮や伊勢神宮、白川郷などさまざまな日本建築に関する文章を書き、それらはタウトの没後に出版されました。『日本美の再発見 岩波書店・篠田英雄・訳 1939年刊・増補改訂版1981年』収録の「飛騨から裏日本へ」は、タウトが1935年に岐阜から北陸、東北を巡った旅日記です。

飛騨へ向かう列車の車窓から日本ラインを見たタウトは、ドイツの岩を思い出します。下呂や高山を訪れて白川の合掌集落を見学しますが、一行は山崩れで行路変更を余儀なくされます。そこで岐阜市に戻るため、越美南線で美濃太田駅へ来ました。

宿を取った亀屋旅館では外国人が珍しかったためか、タウトは警察に通報されてしまいます。そこで群馬県知事から岐阜県知事に宛てた紹介状を見せると、警官は敬礼して去りました。タウトはこの件を「太田は人口が五千しかなくて、警察は退屈しているのだ。」と書きました。その後、サービスが良くなり「お伽噺にでも出てきそうな食事」が出たこと、翌朝に鴨居で頭を打ったこと、それでもよい機嫌で出発したことなどを記しています。

## 【参考文献】

- ・ブルーノ・タウト／著、篠田英雄（しのだひでお）／訳  
『日本タウトの日記1935年・36年（岩波書店：1975年）』
- ・武蔵野美術大学タウト展委員会／編  
『建築家ブルーノ・タウトのすべて 日本美の再発見者（武蔵野美術大学：1984年）』
- ・マンフレッド・シュバイデル、セゾン美術館編著  
『ブルーノ・タウト1880-1938（株式会社トレヴィル：1994年）』
- ・田中辰明（たなかたつあき）／著  
『ブルーノ・タウト 日本美を再発見した建築家（中央公論新社：2012年）』